
空想少女

huront

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

空想少女

【Nコード】

N2940U

【作者名】

huront

【あらすじ】

空想好きな中学一年生の女の子”広瀬美穂”。
友達もいなく、楽しいことと言ったら本を読むことや空想をするこ
と。

そんな彼女の視点から観る、おかしな世界と冷たい現実。

私は、なんでここにいるんだろう。

ブローグ

夕焼けが町を茜色に染め上げていた。

私はオレンジの光が差し込む住宅街の道路を悠々と歩いていた。

空はどこまでも高く、左右はブロック塀に挟まれ、時折十字路を交えながら学校の廊下のように先へ先へと続いている。

薄い明かりを放った街灯が等間隔で置いてある。

私は何となしに鞆を持っていない方の手で、制服の胸の部分に付いているリボンを弄った。小指の先にくるくると巻きつけると、それはまるで赤い糸のようになった。

ブロック塀の上に猫が居た。私は足を止め、猫に向けて腕を伸ばす。小指の赤い糸は、一メートル程離れた猫の元へするすると伸びていき、風に乗ってふわりと猫のところまで飛んでいった。猫はリボンに気づくと、じゃれる様に手で小突き、やがて思い切り噛み付くとリボンを引き千切った。

ひっぱられて小指がきつく締まる。猫はブロック塀の内側に引っ込んだ。指先のリボンはだらりと下がり、それはまるで血のように地面に落ちた。

夕焼けが強く私を照らし出す。

その光が、私の目に現実を映させた。

小指には、何も付いていなかった。

胸のリボンに変わりはなく、広げても長さは精々五十センチしかない。

淡い太陽の光は、すぐに消えてしまふ象徴のように思えて、私を少しだけ切なくさせた。

広瀬美穂。

私は広瀬美穂。地元の私立中学に通う十四歳だ。

友達は、あまり多いほうではない。髪は長いがそれだけで、お洒落というものはあまりしないし、喋りも下手で、クラスではいつも一人で居る地味なタイプの人間だ。

そのことに不満を持ったとはないと言えば嘘になるけど、それで本当に困ったことは一度もなかった。

強いて言えば、家族の前で友達がいる振りを続けることや、学校でのクラスメイトとの共同作業の気まずさに耐えなければならぬことは苦痛だった。

「それでね、きりちゃんたらさ」「おい勝手に俺の席に座るなよ」「ねえ、誰か宿題写させて?」

教室というのは常に誰の声が木霊している。皆どうしてそんなに喋って入れるのだろうかと思っ。

私が声を出す必要がある時と言ったら、誰にでも明るく接するクラスメイトにあいさつされた時や、授業中担任に指された時くらいだ。

私は学校ではいつも本を読んでいる。話す必要もなければ、携帯のように誰かと繋がる必要もない。いつも頭の中で空想をして遊んだ。

空想の扉を開くことは簡単だ。自分の頭の中に耳を澄ませば良い。今は授業中だ。じっとしている時は空想がしやすい。いつの間にか勝手に脳が何かを考えているからだ。教師が黒板を叩く音が、「カッカッカッ」とリズムカルに響いた。まるで電車に乗っているよう

なその心地よさに、私はゆっくり目を閉じる。暗い世界の中、ゆっくりとただその時を待つ。

気付けばいつかを境に、音は止んでいた。目を開く。黒板の前には誰も居なくなっていた。書きかけの文字が中途半端に途切れている。それだけはない。他の生徒もいない。今この教室には私一人しかいなかった。机の上に転がっている鉛筆、開かれた教科書。そこから人だけが綺麗に抜き取られていた。扉が開いたのだ。瞼の裏の暗闇の中、私は安心できる孤独をみつけたのだ。

私は席を立った。教室をでて廊下にでる。隣のクラスを覗くと、やはりそこにも人はいなかった。

ワクワクした。誰も居ない学校で一人きりなんて、そうそう出来る経験じゃない。私は思い切って、普段は自由に入れない職員室に入ることにした。

職員室は甘いコーヒーの香りで満たされていた。教師は仕事だからコーヒーを飲んでも良いんだと先生が言っていた。なら学生の私達も飲んだっていいではないか。学生は勉強が仕事だといつも言っているくせに、としようもない愚痴を心の中で羨ましげに呟いた。

ふと気付くと、あるデスクの前に黒い影が座っているのを見つけた。その影は形からして恐らく男性だろうと推測した。私はなんとなく、その影の隣の机に腰掛けた。

「やあ、コーヒーを飲むかい」

低く、落ち着いた声で影が言った。どこか聴き覚えがあるような声だったが、モヤがかかっているようにはつきりとはわからない。年齢は中年辺りだろうと思った。

「いただきます」

影が入れてくれたコーヒーを受けて取り、口に含んだ。少々苦くて、甘い独特の味が口に広がる。それはとても美味しかった。

「君はなにか悩んでいるね」

影が椅子を回してこちらを向いた。影なんて本来薄っぺらなくせに、やけに立体的で重量感のある影だなと思った。

「悩みですか？特に心当たりがありません」

正直に私は答えた。あつたとしてもこの誰だかわからない影に言おうとは思わないが、この時は本当になかった。

「僕は人の悩みに敏感でね。その人が近づくだけで、その人がどんなことを思っているのか、どんな悩みを抱えているのかわかるのさ。読解力が凄いからね」

それとどこが読解力に関係があるのかわからなかった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2940u/>

空想少女

2011年12月16日01時48分発行